

《資 料》

1996年度の日本経済史の講義

——大人数授業での取り組み——

神 立 春 樹

目 次

- 1 はじめに
- 2 授業の概要
- 3 授業の状況
 - (1) 授業の経過
 - (2) 小文課題への記載
- 4 授業の成果
 - (1) 期末試験とその結果
 - (2) この授業の学生による評価
- 5 反省と教訓

1 はじめに

1996年8月5日の「山陽新聞」に「大学教育改革をめぐる」というつぎの小文が掲載された。私の3回にわたる「シリーズ：問われる大学」の第1回めである。

大学教育改革をめぐる

本年度前期担当の経済学部日本経済史の授業の平常点合否一覧を学生番号で7月9日に発表した。合格は履修登録者562人中の351人で、不合格者には平常点と期末試験によって合否を判定するこの授業の単位取得はきわめて困難であると記

した。

カリキュラムの改正により2年次からの履修となったことなどによって今年の授業は多人数となった。授業は定員402人の教室は満杯で騒然たる状況から始まった。毎回の授業の様子をメモ書きしたが、当初は「続々遅刻して入室、その数限りなし。入室後、しばしたたずむ者あり、のらくら歩く者あり。後ろにて立つままのものあり。前方空席あり、座られたしと言いしも動かず」「遅刻者絶え間なく、雑談きりなし。しばしば、静かにしなさい、雑談やめなさい、と注意。しばしは静かになるが、5分後また始まる。注意し、しばし静かとなり、直ぐざわざわとなる。この繰り返えしなり」という状況であった。

このようにして始まったこの授業は、毎回8時40分に開始、遅刻を認めず、雑談を許さないという厳しい姿勢で臨んだ。13回の講義で、12枚の講義資料を配布。90分の授業の途中、息抜きの時間をとるように工夫し、毎回小ペーパー記入を課した。あるいは前回の理解を問い、あるいは文章部分をイラストで内容を示す、あるいは表をグラフ化する、などである。このような経過のなかで、いつしか学生たちも遅刻も少なく、講義中もそれなりにわきまえるようになってきた。

多人数授業はそれを授業らしくしていくということだけでも容易なことではない。そのための講義資料の作成、毎回課した小ペーパーの番号順整理と記帳、平常点の記入は時間と労力を要する。せめて資料の印刷、小ペーパーの整理などは補助者にサポートしてほしいと思いながらも、しかしなにもかも自分でしなければならぬので仕方がないと言い聞かせながら、履修者220人の第2部の授業についても同様にした。

いま大学の教育改革が問われている。あたかも大方の教員が教育に不熱心であったかのような議論さえあり、制度を変えれば解決するような「制度改革の神話」も生まれつつあるようである。しかし、元来大学教員にとって教育はその存在に関わることであり、大多数の教員は創意と工夫の授業をしてきた。大学教育改革の担い手はこの大学教員をおいてはない。そして大学における教育というものは教員が創造的な研究を行なっていることによってこそ果すことができる

のである。研究にあてる時間はますます少なくなるなど研究環境はきびしくなるなかで、せめては教員に対する教育面におけるサポート体制、教育環境の改善についての配慮が望まれる。

この小文が出た後にそれをみたという学外者から、大学の授業とはこんな状態なのですか、あるいは、大学の先生というのは大変な仕事なのですね、という声が寄せられた。学外者だけでなく、同じ大学内でも自然系・医学系からも、大変ですね、という声が寄せられた。ここでは、このような小文にまとめたこの授業の経過などを改めてふりかえり、反省と教訓を書き記しておきたい。このように書き記すのはこれがいま問われている大学教育の在り方、あるいは教育改革についての論議の一素材となることを期してのことである。⁽¹⁾

2 授業の概要

この授業概要は「シラバス」(『1996講義要覧岡山大学経済学部』)につぎのように記した。

授業科目 日本経済史 (Economic History of Japan)

対象学生 経済学部 2・3・4 年次生 選択

授業の目標並びに概要

日本経済史は、日本における資本主義の生成・発展過程の特質の考察を課題とするが、本講義では日本における産業革命・資本主義の確立を軸とする日本経済史を概観する。

授業計画

第1回～第3回 序章 本講義の課題

第2回～第6回 第1章 日本産業革命の歴史的前提

第7回	第2章 日本資本主義確立期の産業・貿易構造
第8回～第10回	第3章 工業・鉱業における資本制生産の展開
第11回	第4章 日本農業の地主制的再編と農業の位置
第12回	第5章 運輸交通業の展開・財政金融機構の整備
第13回	第6章 日本産業革命の特徴・確立期日本資本主義の特質
第14回	第7章 日本資本主義の発展
第15回	本講義の概括

アドバイス

後期の「日本経済社会史論」が連結する。

「現代日本経済史Ⅰ・Ⅱ」は、本科目の対象時期の後の現代を対象とする本科目に関連の深い科目である。

テキスト・教材・参考書等

プリントを中心とする。なお参考書の③の第1章を使用する。

参考書①石井寛治『日本経済史』（第2版 1991年 東京大学出版会）

②高村直助『日本資本主義史論』（1980年 ミネルバ書房）第1部

③神立春樹『産業革命期における地域編成』（1987年 御茶の水書房）第

1章

成績評価の方法

平常点（授業中の小文）とテスト

コメント

授業に参加しない者は単位の取得はできない。

このような授業計画にもとづき授業を行なった。

3 授業の状況

(1) 授業の経過

この授業は、曜日・時間帯は火曜日第1時限（8時40分～10時10分）で、4月8日からの週の9日に始まり、7月10日からの夏期休業前日の9日までの講義と9月3日の期末試験のものであった。

4月9日の開講に先立ち、4月1日につぎの掲示を行なった。

「この授業を履修する者は、第1回めより必ず出席すること。4月9日開始」

毎回の授業の状況をその都度つぎのようにメモ書きした。

第1回目 4月9日

8時35分教室に入る。

学生数数十名程度。これならやりやすしと思いきや、さにあらず。三三五五、続々遅刻して入室、その数限りなし。入室後、しばしたたずむ者あり、のらくら歩く者あり。後ろにて立つ者あり。前方空席あり、座られたしと言いしも動かず。

大学が配布せし冊子シラバスを開き、この授業内容を説明せんとせしに、大方の学生シラバス持参せず。何の用意もせずに出席せし模様の者多し。

用意した講義資料№1（序章第1節経済史における資本主義経済社会の位置—経済発展段階論概観—）によって内容に入る。

20番教室はほぼ満席近い人数となった。授業は8時40分開始する、遅刻しないようにと注意する。

9時50分頃小ペーパー記入させる。

氏名、学籍番号、出身地・そのワンポイントアピール、出身校・そのワンポイントアピール、日本経済史の授業に臨む心構え。

立つままに書く者あり、うずくまって書く者あり。10時5分頃提出締切りを通告。ばたばた出す者あり。一学生来ていわく「先生、用紙ありません」。われいわ

く「何故に配布せしときに言わずや、汝いま入りしに相違なし」。だましてはいけないと言えり。その学生、黙して去る。

提出ペーパー数は314で、経済学部 of 学生のみであった。

授業終了後、教務の担当係長に教室満杯につき、教室の変更を申し出る。

第2回目 4月16日

教室を変更し、26番教室（定員402）で行なうようになった。

8時35分に入室。広い部屋となりて、それに前回の注意により、大方遅刻せず来ると思いきや、大なる間違いなり。学生、三三五五気楽そうに入りくる。

講義資料No.2（序章第2節資本主義発達史における産業革命）を配布し、これによって講義を行なう。講義資料は400枚用意したが足らなくなった。

遅刻者絶え間なく、雑談きりなし。しばしば「静かにしなさい、雑談やめなさい」と注意。しばしば静かなるが、5分後また始まる。注意し、しばし静かとなり、直ぐざわざわとなる。この繰り返しなり。

小生いわく。「われに授業の義務あり。されどわれに。静かに、考えつつ話す権利あり。汝ら、わが権利を侵害するなかれ」。

注意せしも雑談限りなく、馬鹿馬鹿しき心地す。されど、気を取りなおして授業進む。

この日小ペーパー記入の課題は「人類の経済生活・経済制度の歴史における現在」で、前回配布した資料にもとづいて説明したことがらである。

小ペーパーの提出枚数は325で、うちわけは経済学科316、法学部1、文学部5、教育学部1、理学部1、科目別履修生（経済学部）1であった。

授業終了時に質問があった。本日の講義資料の生活水準論争の箇所についてであった。

第3回目 4月23日

授業開始の冒頭に小ペーパー記入を課した。テーマは、「産業革命と工業化—その異同一—」で、前回講義資料により説明したことである。

用紙400枚準備、40枚ほど手許に置き、あとは配布せしも、用紙こないという者

多し。また、遅れくる者多く、用紙不足を訴える。手許のものもすべてなくなれり。

講義室に来る前に、教務の I. K 氏に 9 時になったら教室の入口につぎの文書の掲示を依頼した。

遅刻の許容時刻は過ぎました。入室は差し控えてください。なお本日の小ペーパー記入は終了しました。

小ペーパーの記入を終了し、9 時 10 分より、講義資料 No. 3（序章第 2 節 2 イギリスにおける産業革命）、No. 4（序章第 3 節 日本産業革命研究史と残された課題）を配布して講義を開始する。

入口の掲示にも拘わらず、入室、いな這入る者たえまなし。小生いわく。「入口の掲示、見えざりしか。見して何故に入るや」「いま入りし者、退室されたし」。なお入りくる者あり。

講義資料 No. 3, No. 4 は各 380 枚用意せり。すべてなくなり、授業中教壇を離れて歩き話しする際に、教卓の教授用プリントもなくなれり。

小生いわく。「この場は教員 1 対学生 400 の戦いの場なり。われいかに熟達教師といえども衆寡敵せず。400 にはかなわざりし。されどわれ、あらゆる方策にて烏合の衆らしき者どもと戦わん。これ戦争なり。戦争ならずとも格闘技なり。われ 62 にして老齢、体力あまりなし。しからば智もてあらゆる戦術にて立ち向かう。心せよ。」

ペーパー記入提出時。最後に慌しく出せし、ノートを裂きて記すもの 2 枚あり。また、最後の提出時に入りきて、恰も初めから居りしごとく用紙不足と言ひし者 2 人あり。小生いわく。「ごま化すなかれ」。

ペーパー提出数は 347 で、うちわけは経済学部 336、文学部 6、法学部 2、教育学部 2、理学部 1、科目別履修生（経済学部）1 であった。

この日、オフィス・アワーに、2 年次生 E. I 来室。本日の小ペーパー記入課題「産業革命と工業化—その異同—」などについて質問があった。

第 4 回目 4 月 30 日

8時35分入室，8時40分開始

講義資料No.5（第1章日本産業革命の歴史的前提）を配布して授業開始するも、大挙しての学生入室あり。これは先週よりも多し。9時までの間に授業開始時におりし学生よりも多くが入りきたれり。入りきたりて雑々たる状況となりて、講義にならず。

いかにして遅刻者が集中せると考えるに、先週、部屋の入口に「遅刻の許容時刻は過ぎました。入室は差し控えてください。なお本日の小ペーパー記入は終了しました」を9時に掲示せしが、9時までならば遅刻しても可なりと思ひて、8時40分から9時の間に殺到したるにや。

たまりかねて、「本授業は次回以降、遅刻者の入室を禁止する」と板書した。そして、これでは8時40分から9時までの20分間は授業にならない、遅刻許容時間を設けると授業ができなくなるので、以後は遅刻は一切認めないこととする、と注意した。

授業の途中9時15分頃に5分中断、大いに話してよし、と息抜きの時間5分与える。

授業開始前に教務のI.K氏に、9時に教室入口に貼紙。「遅刻の許容時刻は過ぎました。入室は禁止します」の掲示をすることをすでに依頼してあった。

それでも入り来る者あり。小ペーパー記入時に教室内を後ろまで廻りしが、床にうずくまれ者数人あり。なぜに席につかざるやと問うに、答えていわく。「座る席なし」と。小生いわく。前方に空席少なからずあり。そこへ行けといひしに、従わず。

小ペーパー記入テーマは「紡績業と織物業—その異同」で、用意した400枚の用紙すべてなくなった。

小ペーパー提出枚数は330で、うちわけは経済学部320，法学部2，文学部4，教育学部2，理学部1，科目別履修生（経済学部）1であった。

第5回目 5月7日

連休の後である。8時37分教壇に立つ。学生入りつつあるなか、まず「本日は前回使用の講義資料№5（前回配布）を使用する。静かに講義をさせて下さい」と板書した。

講義開始の後、教務のI・K氏入口につぎの文書を掲示。

本日の日本経済史の講義は開始しました。遅刻者の入室を禁じます。理由は講義の妨害となるからです。

なお、第2部の日本経済史の講義を、毎週月曜日第1限（17時40分～19時10分、授業開始17時50分）に行なっているので、それを聴くことを許します。

本日の内容は、第1章第1節第2項と第2節日本資本主義における本源的蓄積、であった。

この日、大学院文化科学研究科のK・M授業に出席。途中で、起立を願い、齢75歳、博士課程で3年後の学位取得をめざしている旨、学生諸君に紹介した。

9時20分頃「5分間ほど休憩。おしゃべりしてよろしい」と告げる。

9時50分に小ペーパー記入に入る。課題は、「講義資料№5の幕藩領主制経済の基本構造をイラスト化しなさい」である。

提出時に2年次生K・S、「大阪に領主によって送られた米はどうなるのですか」。よい質問である。

この日、ペーパー提出数は351。うちわけは経済学部340のほか、文学部5、法学部2、教育学部2、理学部1、科目履修生（経済学部）1。

この日出席した大学院文化科学研究科のK・M、後日（5月9日）来室し、受講席から観察したつぎのような様子を話してくれた。

8時35分私が入室しときの学生の概数120人、8時40分開始し、板書の後、45分頃、「静かにしなさい」と第1回めの注意しときほぼ満杯となった。5分の息抜き時間に傍の学生に、なぜに出席するのか聞くと、出欠をとるからだと言った。おしゃべりする2人組がいて、5分の息抜きの時間にジュースを飲んだりしていた。

そして、K・Mは私にいくつかの提案をした。私は昨年の授業（社会科学入門Ⅱ）時の対話の試みなどの資料を見せるなどした。

第6回目 5月14日

8時35分教室に入り、8時40分授業開始。まず、「本日も前回使用の講義資料№5を使用する。静に講義をさせて下さい。」と板書する。

講義開始の後、入口に前回と同様の掲示を教務のI・K氏に依頼した。

講義内容は第1章第2節前回のつづきを行なった。

講義開始時に入る者多く、しばし雑然。注意せしも効なし。

板書始めたり。書き写せよと言って、大きな字にてどんどん書き、写さざれば消すと言われ、はじめて、学生たち書き写し始め、ようやく雑談の余裕もなくなるといふごとく、静かになれり。

板書に時間をとられ途中5分の息抜きの時間をとることができなかった。

9時40分に小ペーパー記入を行なう。課題は「地租改正の第1則に従い地価を算出せよ。つづいて地租・地方税額を算出せよ。さらに余裕ある者は、その地租・地方税は生産高の何％にあたるかを算出せよ」である。

10時頃から提出し、退室しはじめるが、多くは終了時の10時10分に提出した。

提出数は368で、うちわけは経済学部356、法学部3、文学部5、教育学部2、理学部1、科目別履修生（経済学部）であった。

第7回目 5月21日

8時35分教室に入り、8時40分授業開始。8時25分には教務系の部屋に寄って雑談するゆとりがあったのに、小ペーパー記入用紙を受けとるのを忘れたので、前方に座せる学生に教務室への連絡を依頼する。

第1章第2節前回の補足を行ない、第1章を終了。この際参考書としてあげたものによって松方デフレ期における耕地売買・質入書入についての具体例を示す。途中、教務のI・K氏が用紙を持参してくださる。

「毎回入口での張紙はこの人なり。私の依頼なり」と彼を学生に紹介。

I. K氏が戻るとき、入口に前々回と同じ内容の掲示を依頼する。

講義はひきつづき第2章に入る。用意した講義資料No.6（第2章日本資本主義確立期の産業貿易構造第1節戦前期の日本の貿易構造 第2節確立期の産業貿易構造）により進める。貿易三環節論の説明の後、1909（明治42）年の産業・貿易構造の説明に入る。

9時45分に小ペーパー記入、課題は「地租改正と資本創出の関連をイラストで示しなさい」である。

10時頃から提出して、退室し始めり。そのとき一学生来ていわく。「用紙不足なり。後ろの方はなきなり」。小生いわく「何故に配布せし後にすぐ言わずや、いま提出しはじめしときになぜ用紙なしと言うや。いま入りしにあらずや。嘘を言うなかれ」。学生いわく「嘘にあらず、後ろの方は用紙なきなり。われのみにあらず」。小生いわく「用紙は十分配布せり。足らぬことなし。嘘いう貴君の名前知りたし。名乗りたし」。その学生は「それならよし」と言って去れり。小ペーパー提出時に「余りし用紙持ってこられたし」と言いしかば、各列後方の者持ち来れり。

提出数は347で、うちわけは、経済学部336、法学部2、文学部5、教育学部2、理学部1、科目別履修生（経済学部）1であった。文化科学研究科のK・M本日は松山帰省のため出席せず。

第8回目 5月28日

8時35分教室に入り、8時40分、直ちに「戦前期日本の貿易三環節論を図示せよ。時間9時まで」の小ペーパー記入を課す。

9時少々すぎに終了を告げ、各列最左端に集め、最後尾の者に後方より前方に集め来ることを願う。

収集後、9時25分頃、講義に入る。講義資料No.7（第3章工業・鉱業における資本制生産の展開、第1節工鉱業の構成、第2節消費財生産部門〔第Ⅱ部門〕における展開—いわゆる軽工業—）、No.8（紡績業についての補足資料（図表））を配布。配布中は雑談しても差して支えないと告げる。

提出数は340で、うちわけは経済学部329，法学部2，文学部5，教育学部2，理学部1，科目別履修生（経済学部）1であった。ほかに文化科学研究科のK・M出席し、またすでに日本経済史を履修済みの第二部のU・Hが聴講したい旨申し出て出席した。

第9回目 6月4日

8時35分教室に入り、8時40分、直ちに小ペーパー記入を行なう。課題は、「産業資本確立期の部門別生産輪移入輪移出構成を図示しなさい」で、時間は9時までと板書した。

9時少々すぎに終了を告げ、各列最左端に集め、最後列の者に後方より前方に集め来ることを願う。

収集後、講義に入る。前回配布の資料No.7により、1909（明治42）年の工場制工業の展開・主要部門別を説明した後、消費財生産部門における資本制生産の展開の検討に入る。紡績業について資料No.8の図表によって説明する。ミュール紡績機の原理について実演し、学生3人にもやって貰う。

小ペーパーの提出数は324で、うちわけは経済学部314，法学部2，文学部5，教育学部1，理学部1，科目別履修生（経済学部）1である。ほかに文化科学研究科のK・M，第二部のU・Hが出席した。

第10回目 6月11日

前々回配布資料No.7により、消費財生産部門における資本制生産の展開の検討について、製糸業、織物業について説明する。

9時15分に小ペーパー記入、課題は、「1909年の日本の工業・鉱業における工場・鉱業所の特徴をグラフで示しなさい」である。

9時40分終了を告げ、ペーパーは退室時提出とし、講義資料No.9（第3章第3節生産財生産部門〔＝第I部門〕—いわゆる重化学工業・鉱業，第4章農業の再編と日本資本主義における農業の位置）の前半により、生産財生産部門における資本制生産の展開について説明する。鉱業と重工業については終る。

小ペーパー提出数は324で、うちわけは経済学部314，法学部2，文学部5，教育学部2，理学部1。科目別履修生（経済学部）1である。ほかに文化科学研究科のK・Mが出席した。

第11回目 6月18日

資料№9の後半（第4章農業の再編と日本資本主義における農業の位置，第1節農業の地主制的再編，第2節日本資本主義における地主制農業）により，第4章農業の再編と日本資本主義における位置，に入る。

9時15分に小ペーパー記入に入る。課題は，「三重紡績所を訪ねて」で，配布した資料にもとづきルポルタージュのように書くといひ，と示唆した。

小ペーパー提出数は323で，うちわけは経済学部314，法学部4，文学部2，ほかに教育学部1，理学部1，科目別履修生（経済学部）1である。ほかに文化科学研究科のK・Mも出席した。

第12回め 6月25日

資料№10（第5章運輸交通業の発展・財政金融機構の整備，第1節運輸交通業の発展，第2節財政金融機構の整備，第6章日本産業革命の特質，第7章日本資本主義の発展第1節日本資本主義の展開）により，第5章，第6章について講義する。

本日の小ペーパー記入は，「日本産業革命における産業発展・編成を図で示しなさい」を課題とした。

小ペーパー提出数は328で，うちわけは経済学部320，法学部2，文学部3，教育学部1，理学部1，科目別履修生（経済学部）1である。ほかに文化科学研究科のK・Mも出席した。

第13回目 7月3日

資料№10により第7章を講義する。

補足として後期の日本経済社会史論への橋渡しとして，資料№11（1888年・1919年府県別物産額，地方別物産額などの表），資料№12（中村良平教授作成：戦後の総生産額府県別，域内生産額のシェア図表）にもとづいて説明

した。

本日の小ペーパー記入は、「地域別物産額の占有率を図示せよ」であった。

小ペーパーの提出数は337で、うちわけは経済学部328，法学部2，文学部4，教育学部1，理学部1，科目別履修生（経済学部）1である。ほかに文化科学のK・Mが出席した。

7月の第2火曜日の7月9日は集中講義期間となり平常授業は休止となった。この日平常点合否一覧表を掲示した。

日本経済史平常点一覧

○印は平常点合格 期末試験を受けること

△ } 印は平常点不合格
× }

×は期末試験を受けても総合成績合格はきわめて困難である。

△は期末試験がきわめてよければ総合成績合格の余地はある。

平常点合格者は351人。うちわけは、経済学部341，法学部2，文学部5，教育学部1，理学部1，科目別履修生（経済学部）1である。

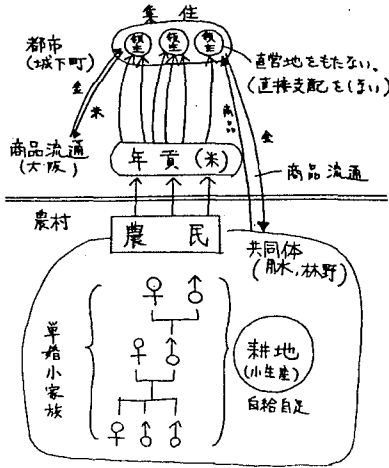
(2) 小文課題への記載

この授業では毎回小ペーパー記入を課した。「最初は毎回ペーパーを書くのはしんどいなあと思っていたが、回を重ねるごとにペーパーを書くのが楽しくなった。三重紡績所のルポなどたいへんユニークだったと思う」「全回、小ペーパーがあったので適度な緊張があって良かった」などと記している。

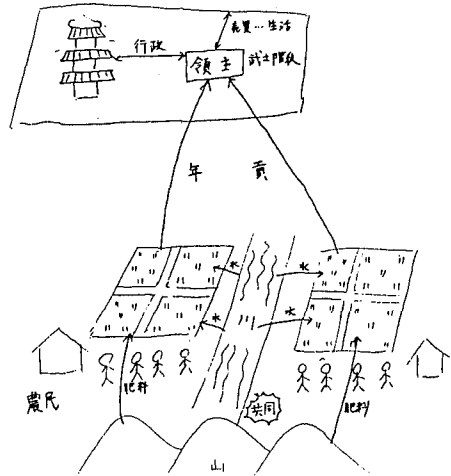
5月7日には、「講義資料No.5の幕藩領主制経済の基本構造をイラスト化しなさい」を課したが、学生が記入したもの2例をあげる。

この課題は、領主層が直営地を持たず都市集住していること、農民に土地を所持させ、年貢を負担・納入させること、年貢米の販売と輸送が重要で、

領主制経済の基本構造



2年次生 (S. J)



2年次生 (S. T)

領主制の商品流通が発達していること、都市集住の領主層の生活物資は結局は農村に求めるのであり、農民を商品生産に巻き込むこと、農民は単婚小家族で所持地の耕作に励むが、水稻生産に必要な水・肥料を通じて共同体関係のもとにあること、などが基本である。この2例は、いずれも上述のことをかなり示している。

6月18日は「三重紡績所を訪ねて」というテーマであった。ルポルタージュのように書く面白いものとなると口頭で述べた。

三重紡績所を訪ねて

1886年6月18日、私は四日市郊外の三重紡績所を訪問した。その建物を目にした時、思わず感嘆の声をあげた。実に立派な建物である。門を入ると左手に土蔵、右手に事務所があり、正面に巨大な工場がある。敷地は全て合わせると、何と1町2反歩にもなるという。国を挙げての殖産興業政策の重点政策として建設されたものだけのことはある。全国に十ヶ所設立された二千鍾紡績所のなかで

も、ここ三重紡績所は最高ランクであるという。わが国も西欧列強に負けない近代的紡績業が育成されたのである。江戸幕府が終ってまだ20年で、西欧列強に肩を並べたこの紡績所は日本国民の誇りであると感慨にふけた。

工場内に入ってみた。二千錘の大工場である。数えきれない程の職工が働いている。次から次へと綿糸が生産されているのだ、と思ったが、よく見ると多くの機械が止り、職工が手を休めている。何と、中古の機械を購入したため作業が順序よくいかず、故障も多いというのだ。なんということか。私は工場の外を見せてもらった。工場の裏手に動力となる水路があった。ところが水が流れていないのだ。当然水車も回っていない。いったい何で機械を動かしているのか。水車の横に煙突が立って煙がもくもくと上っている。所長の話では今は田んぼに水が必要な時期で、紡績所にまわす水などないということだ。たびたびの水不足のために蒸気機関を動力にすることにしたのだという。なんとわが国の最高水準の技術で造られた三重紡績所がこのありさまである。西洋列強諸国との力の差をまざまざと見せつけられたような訪問であった。(3年次生A・K)

三重紡績所は、1881(明治14)年設立、1882年開業の民間紡績所である。政府の紡績業育成政策の重点であった二千錘規模の10紡績所の一つである。この二千錘紡績所は多くは不振に終わったが、その理由として言われていることは、錘数規模の過小、水力利用の限定性、棉作や水力利用に関する立地条件の制限性、技術、とりわけ技術者の欠乏などである。三重紡績所は、二千錘紡績所10紡績所のなかでは営業成績がよいものであったが、他と同じく経営困難であった。その理由として、資本金ノ夥多ナル事、機械ノ不完全ナル事、機械ノ解説書ナキ事、前紡機ト精紡機トノ作業歩合約合ハサルコト、水力ノ不足ナル事、をあげている。⁽²⁾配布した三重紡績所図には煙突があるが、これは水力では不十分であるので蒸気機関を備えたものである。資本金ノ夥多ナル事、とはこのように蒸気機関の設置によって予定外の多額の資本金が必要である、ということである。この文章はこれらのことを読み込んだもの

となっている。

4 授業の成果

(1) 期末試験とその結果

8月31日で夏期休業期間は終了、9月第1週から期末試験期間となった。この授業科目の試験日は9月2日であった。試験問題はつぎのとおりである。

試験問題

日本産業革命の展開について論じなさい。

その際、つぎの用語を意味あるものとして使用すること。初めて使用するとき

☐ で囲むこと。

開港 器械製糸 商業銀行 地租改正 地主制 鶴嘴 三重紡績所
ミュール精紡機 明治30年代 八幡製鉄所

以上のキー・ワードを使用して日本の産業革命を論ずるということであるが、個々ばらばらではなくて、相互に関連させながら論ずるということを求めた。そして、日本産業革命の基軸となった紡績業について言えば、三重紡績所はストレートに日本紡績業の発展と結びつかず、この二千錠紡績所とは異なる大阪紡績所が画期となるので、三重紡績所にとどまることなく大阪紡績所にも論及したものがよい解答と言える。ミュール精紡機についてはリング精紡機にも言及することが大切である。このような観点からの答案の評価を行なった。

試験の答案の採点の結果は、80点以上A、70点以上80点未満B、60点以上70点未満C、60点未満Dとして、A：41、B：254、C：50、D：12、合計357であった。合計に対する比率は、A：11.5%、B：71.1%、C：14.0%、

D：2.3%となる。登録総数は562であるが、受験しない者205は評価不能となった。Dの12のうちには平常点を参考にして最終的には合格となった者もあった。

本年度のこの結果は、過去と比べて特徴がある。尤も過去のものは通年のものであり、厳密には比較できないが、つぎのように言える。登録総数に対する評価不能の割合は、1994年は183のうちの114、62.3%、1992年は117のうちの110、62.1%であったが、本年度は36.4%で著しく小さい。登録総数が格段に大きいのに試験を受けた者の割合が過去よりもはるかに大きいのである。試験を受けて意味があるのは平常点の合格者、すなわち平素授業に参加している者である。本年度は学生たちは授業によく出たのである。

成績をみると、1994年は、A：18、B：36、C：2、D：13、合計56で、それぞれ32.1%、64.3%、3.6%、23.2%である。1992年は、A：20、B：28、C：16、D：3、合計67で、それぞれ29.9%、41.8%、23.9%、4.5%である。Aの割合が本年度はかなり小さい。他方、本年度はBの割合がきわめて大きい。

本年度の登録総数は驚くべき多さであったが、授業に出席する者の割合は例年よりかなり大きかった。試験の答案の合格者の割合も大きいが、成績はBが多く、A、すなわちすぐれた答案の割合は少なかったのである。2年次生が履修できるようになり、2年次生が履修したこと自体が出席率をたかくしたと言えるが、この2年次生に対しては、昨年度社会科学入門を担当したときの履修済みの者がかなりいて、私の授業の仕方などを知る学生がかなりいたことも一因となっていると言えよう。しかし、日々授業に出ることを求め、小ペーパー記入を課したことなどが、出席率を高めさせたと思われる。しかし、出席した授業は大人数授業である。大人数であることからくる講義内容の伝わりにくさが、Aを少なくしたのではないかと思われる。

(2) この授業の学生による評価

無記名アンケートのうちのⅡこの授業についての箇所（次ページの「この授業について」のアンケートの項目とその回答）によって、学生による評価を記そう。

(1)のこの授業についての意見では、出席するように仕向けたことについては（回答310，かっこ内は以下同じ），大賛成・賛成71.6%，反対・大反対14.5%，どちらでも13.9%，遅刻に対し厳しく対処したことについては（299），57.9%，28.0%，14.0%，授業中の雑談を禁じたことについては（308），84.7%，5.5%，9.7%，小ペーパー記入を毎回課したことについては（299），83.9%，7.7%，8.4%，平常点可否を公表したことについては（311），91.3%，2.9%，5.8%である。平常点公表の9割の賛成は、「4年生にとっては気分的に楽になる」という記入があったが，試験にリラックスして臨めるという点などで学生にとってはよいことであろう。小ペーパー記入については，すでに引用したように，たんなる受身でなく，なんらかのアクションという意味でもよいものであろう。雑談厳禁も賛成が85%にもなる。学生たちの雑談は教員を悩ますが，学生自身も実は迷惑なのである。迷惑だと思いながら放置されていると自分も雑談してしまう，ということを経験していることがあるが，厳禁の姿勢はただし。ただこの欄には記入はせずに「先生が注意されるそのいい方がよくない」というものがあった。アンケート(1)①⑤はともに+1，(2)の③④⑤⑦⑧はいずれも+2，⑧は+1，総合判定+1という，全体的には積極的に受けとめてくれた学生（経済2年次女子）の回答においてのものであり，注意の仕方の大切を考えさせてくれる記述である。出席を仕向けたことにも71.6%という予想を越える賛成があった。遅刻に対する厳しい態度であるが，これには反対が28%という他の項目よりはるかに多い反対があるが，それでも57.9%が賛成である。この出席強要，遅刻締め出しについては，もう一つの記名による学生自己評価票における「この授業での収穫があれば記してください」という項目の記述で関説す

表 「この授業について」のアンケートの項目とその回答 上段 実数, 下段 構成比

(1) この授業におけるつぎのことについての意見						
	大賛成	賛成	反対	大反対	どう でも	合計
①出席するように仕向けたことについて	76	146	40	5	43	310
	24.5	47.1	12.9	1.6	13.9	100.0
②遅刻に対する厳しく対処したことについて	66	107	74	10	42	299
	22.1	35.8	24.7	3.3	14.0	100.0
③授業中の雑談を禁じたことについて	106	155	17	0	30	308
	34.4	50.3	5.5	0	9.7	100.0
④小ペーパー記入を毎回課したことについて	94	157	20	3	25	299
	31.4	52.5	6.7	1.0	8.4	100.0
⑤平常点合否を公表したことについて	169	115	8	1	18	311
	54.3	37.0	2.6	0.32	5.8	100.0
(2) この授業で次のそれぞれについての感想						
	肯定	稍肯定	普通	稍否定	否定	合計
①授業内容の適切さ	71	133	95	6	2	307
	23.1	43.3	30.9	2.0	0.65	100.0
②授業レベルの適切さ	71	119	101	11	2	304
	23.3	39.1	33.2	3.6	0.66	100.0
③授業の進め方 (スピード)	93	86	111	13	0	303
	30.7	28.4	36.6	4.3	0	100.0
④担当者の話し方	82	89	97	23	3	294
	27.9	30.3	33.0	7.8	1.0	100.0
⑤担当者の教える熱意	198	75	28	0	2	303
	65.3	24.8	9.2	0	0.66	100.0
⑥担当者の教え方	84	126	88	8	2	308
	27.3	40.9	28.6	2.6	0.65	100.0
⑦配布講義資料の内容	94	101	94	19	2	310
	30.3	32.6	30.3	6.1	0.66	100.0
⑧授業内容の伝わり方	69	131	84	15	2	306
	22.5	42.8	29.1	4.9	0.65	100.0
⑨この授業を履修してよかった	113	120	63	5	3	303
	37.1	39.5	20.7	1.6	0.99	100.0
(3) この授業の総合判定						
	大変よい	ややよい	普通	やや悪い	大変悪い	合計
	90	146	46	4	3	259
	31.1	50.5	15.9	1.4	1.0	100.0

る。

やむを得ない遅刻がある。その個々の事情を聞くことなく一律に対応することは問題があるが、他に方法がない。なお、授業経過が示すように、遅刻も次第に少なくなり、後半には言わずにすむようになった。

(2)のこの授業についての感想では、授業内容の適切さ(回答数307, 以下同じ) : 肯定・やや肯定66.7%, 普通30.9%, やや否定・否定2.0%, 授業レベルの適切さ(304) : 62.4%, 33.2%, 4.3%, 授業の進め方(スピード)(303) : 59.1%, 36.6%, 4.3%, 担当者の話し方(294) : 58.2%, 33.0%, 8.8%, 担当者の教える熱意(303) : 90.1%, 9.2%, 0.66%, 担当者の教え方(308) : 78.1%, 28.6%, 3.3%, 配布講義資料の内容(310) : 62.9%, 30.3%, 6.8%, 授業内容の伝わり方(306) : 65.3%, 29.1%, 5.6%, この授業を履修してよかった(303) : 76.6%, 20.7%, 2.6%と、いずれも肯定的なものが否定的なものをはるかに上回る。肯定的が58.2%で最も小さくて、否定的が最も大きいのは話し方である。先ほどの遅刻者への言い方がよくないという記入文と通ずることがあるように思われる。ただし「どの先生よりも聴きとりやすかった」という書込みもある。担当者の教える熱意は90.1%と高く、なかには+3との書込みがあった。

この授業を履修してよかったが65.3%あるが、単位の取得の見通しがいつていることからのことということのほかにも内容的にもあろう。

(3)この授業の総合判定は、大変よい : 90, 31.1%, ややよい : 146, 50.5%, 普通 : 46, 15.9%, やや悪い : 4, 1.4%, 大変悪い : 3, 1.0%, 合計759である。

この無記名での授業評価のほかに学生自身の自己評価には、この授業での収穫があれば記してください、という項目がある。そこには、授業内容に関するもののほかに、「授業への継続した出席習慣が身についた」「出席率があがった」「早起きは三文の得」「授業への臨み方」「一番「勉強した」という実感を得られてうれしい」「授業に対して集中できた」「時間を守ることが大切

なこと」「まじめにやればいいことがある（はず）」「早起きの習慣がある程度できました」「注意されなければ授業態度をあらためない人が多いとあらためて感じた」「わりと楽しく参加できた、静かだし」「とりあえず早起きの習慣がついたと思います」「少しだれていた大学生活に刺激を与えてくれた」「早寝早起き」「出席の大切さがわかった」「授業への本来あるべき臨み方」「一限目でも集中できるということがわかった」「朝早く起きれるようになった」「授業はまじめに出れば楽しい」「きちんとした姿勢で授業に臨むのが普通のことだとわかった」「楽しく授業に臨むことができた」「ぜったい授業には遅刻してはいけないと思った」「早起きの習慣が身についた」「まじめに授業に参加することに達成感を感じた」「朝早く起きて勉強できた」「自己管理」「授業に取り組む姿勢」「時間を少しもむだにしなくて勉強になった」というのがある。まずは生活習慣にふれているのである。また、「大学にも面白い講義があるとわかったのが大収穫」「先生の対応で授業をうける態度がよくなったと思う」「大学の授業では教授の熱心さが大事だと感じさせられた」「授業は板書だけでなくヒアリングの方が重要であること」というものもある。

同じく記名学生自己評価票の「この授業に対する感想・意見」で、無記名でのこの授業に対する評価はして貰うが、この記名のものにあってこの授業に対する意見・感想があれば記入して貰った。「充実した授業だった」「遅刻の許容範囲を広げてほしいです」「朝おきるのがつらく、ゆううつな火曜日の1限目であったけれどもおわってみるととても自己満足できてうれしい」「雑談を禁じて下さったのは助かりました」「他講義でザワザワ学生たちがさわりでもほっておく場合があります。その点この講義はいい環境で聴けてよかったと思います」「授業中私語がなかったの良かった。集中できる」「この授業のみではないが大学の講義において、教授（いままでは研究のみで教育への関心は低い）の熱心さが必要であるし、教える技術を身につけることが必要だと思った。しかもその事が今日の読売新聞のコラムに書いてあっ

た」「毎時間、先生が熱心にやる気のある人を評価してくれるのは非常にありがたいです」「厳しいと思ったが、現状がこれなのでしかたないなと感じた」「これからこのやり方で授業を進めて下さい」「朝8:40からの熱心な指導には感謝しています」「この授業は毎回ペーパー記入があるし、遅刻しても入れない。こんな授業もいくつか必要であると思うし、中々いいことだと思います。すべてがこんなのならしんどいですが」「授業が私語のため中断されたのが残念だった。配布プリントがよくまとめてあってよかった。ができれば前回のうちに配布してほしかった」、(以上1995年度入学の2年次生)入学、「先生の熱意を大に感じる事ができたのは私にとってうれしいことです」「毎回小ペーパーがあったので適度な緊張感があって良かった」「先生の提案が、要求がきびしいけれど学生は出席する、途中退室もだめです。小ペーパーテストも授業への理解に役立つ」「真剣に教えてくださりありがとうございました」「出席重視はいいと思う」「平常点重視というやり方は実にありがたい。この授業のように努力した人が単位取得できる講義を増やしてほしい」「『8時40分に遅れたら入れさせない』と初めに言ったからには貫き通していただきたい」「授業に熱意が感じられて私も真剣に授業を受けることができました」「この授業の先生はきびしいと言われても、先生の教え方がいと思うので challenge してみたいです」「やり方は厳しい方がよい。先生のやり方は正しいと思う」「新聞の記事を読みました。授業のあり方はこうであると教えてもらった授業でした」「400人を相手にした先生の授業のパワーを感じました。今後も熱心な授業を期待しています」「きびしいほうがやる気がでてよいと思う」「先生の意気込みに圧倒され負けじと朝一番授業へ行ったらけれども今思うとよかった」「雑談、遅刻については学生としてだけではなく、社会人としての私たちがおおいに反省すべきである。教示はとても有難く思います」「一限目で寝たくてつらかった」「5%のできであると言われたのが一番くやしかった。あの時からかなりペーパーに力を入れたつもり。でも熱心な教え方についていきたくなる学生はけっこういるは

ずです」(以上1994年度入学3年次生), などである。

なお、「授業料から考えると1科目につき約1万円になります。僕は理解に乏しかったので1万円分理解することはできませんでした。神立先生は1万円分話されたでしょうか(1万円分の内容を話されると理解できない生徒が多くなると思います)」, 「すべての大学で岡大と同様の学生の態度が存在するのかどうかは常々疑問である。岡大と比してそれ以上によい学生態度が存在するならば問題である」「大学の授業で遅刻をするなどが、いまの時代に帽子をとれとかと言うのはナンセンスだ。大学生ともなると個人主義だと思うので生徒をもっと1人の大人として扱ってほしい」というのがあることをあげておこう。10月1日後期の日本経済社会史論の開始にあたり、授業中に飲み食いしないように、帽子は脱ぐようにと注意した。それにしても常々、生徒とは中等教育機関に学ぶ者のことであり、大学生は生徒ではなく学生であると言っているのに、自らを学生と認識できないことは残念である。

5 反省と教訓

大学設置基準の改正、大綱化を契機とするカリキュラムの大改正により、授業にも大きく様が変わりが生じた。

本年度の日本経済史の授業がこのような大人数授業となったのは、従来3, 4年次対象であったものが、2年次以上となったことによって2年次生が履修することになったこと、前年度は一般科目の前期、後期各1コマの担当にともないこの科目を開講しなかったこと、という二つの理由によるのである。そしてこの時間帯にはこの科目だけで、並行授業がないということが加わる。

それらはすべて教員・大学側の都合によることであり、その結果学生たちは、このような大人数での授業を受けざるを得なくなってしまったのであ

る。大人数での授業は教員にとって苦痛であるが、静かに学びたいという学生たちにとっても迷惑千万なことである。

内容的にもそうである。セメスター制になり、従来は通年で行なってきた授業を二分し、前期、後期それぞれに完結性をもたせなければならない。日本経済史について言えば、それは半期づつの日本経済史と日本経済社会史論に二分し、従来は産業編成論・地域編成論・生活編成論の三部構成による日本産業革命論の11月はじめまでの講義していた産業編成論の部分を独立させて日本経済史として前期セメスターで終了しなければならず、速いテンポで授業をしなければならなかった。授業の進行のところでみたように、一回で二つの章を済まざるを得ないこともあった。速いテンポで進めるために講義資料を丹念に作成してそれにもとづいて行なうが、内容的にゆとりのないものになってしまう。過渡期の問題であるとしても、このセメスター制への移行も教員・大学側が行ったことであり、学生にとっては大きな迷惑であろう。

万事受身の学生たちに対する大人数授業は、これを授業らしくしていくこと自体がまことに困難である。うるさく言わないと学生が出て来なくなり、人数の少ない授業となる。試験のときは満杯となり、多数の答案を読むことになるが、そのときだけ我慢をすればよい、学生を出させるようにしたら駄目だ、との大人数授業を乗り切るアドバイスもあった。しかし、私はここに記したように行なってきた。そして、それがいまの大学において必要なことの一つであると思っている。

10月に入り後期セメスターの日本経済社会史論の講義が始まった。前期セメスターの日本経済史の履修登録者の多くが引続き登録していることに加えて、この授業は文学部の人文地理学特講（歴史地理学分野）の読み替えとなっていることにより、文学部・教育学部などの学生80人の登録があり、さらに大人数となった。10月1日の第1回めは、この講義の内容を講義資料No. 1により説明するとともに、この冒頭に引用した記事についてのコメント

と、授業への臨み方を記してもらった。多くが、前期の日本経済史のやり方に賛成してくれている。記名であるが、先の無記名のアンケートの結果から見てもその意見は率直なものであろう。このような方針でやるという結果になると思いつつも、なぜこのようにしないといけないのか、馬鹿馬鹿しい、無駄だと思いながら進めてきたことを、無気力だ、駄目だと言われがち、思われがちな学生たちに支持されたことに励まされて、後期の授業にも同様に、そしていっそうよいものとなるように取組みたいと思う。学生に励まされてということと言うと、授業とは、まことに教員が学生とともに創りあげていくものである。

それにしても大学教員はきわめて多忙である。他大学での非常勤講師や行政機関等の委員などに関わることなく、大学教員本来の仕事である研究と教育、そして大学構成員としての全学・学部内の委員などの本務校での仕事に専念している。行動範囲は広くなく、キャンパス内での日常である。そのような私でも、しかしこの日常は繁忙そのものである。そもそも大学教員の大学教員たるゆえんはその研究であり、その創造的活力を基礎にしてこそその存在に関わる教育における活力も生まれるのである。大学教員は大学教員である以上、つねに研究に励まなければならない。しかし、この研究面での研究環境はきびしい。なによりも重要な研究の時間そのものの確保が容易ではない。ますますそれに当てることのできる時間が少なく、そしてこまぎれとなる。研究面におけるサポートは一切なく、すべてを自分でやらなくてはならない。

大学教員にとって教育はその存在に関わることであり、それに大きな力を注ぐことは自明のことである。大学教員の多くは、そのようにしてきたし、している。ところでこの教育には授業と授業形態以外の指導がある。そしてそれらはいずれも多大の時間と労力を要する。授業についていえば、授業内容そのものにおいても、授業の実施をめぐることがらにおいても多大の時間と労力を要するのである。前者のためにはたゆまざる研究活動であり、後者

としては授業の準備、事後の整理であるが、これらにも多大の時間と労力を要する。この授業の例では、講義資料の作成のための原稿作成からはじまり印刷までの一連の準備、授業中の配布にも気を配る。毎回課した小ペーパー作成は、回収した記入用紙の番号順整理、内容のチェック、出席整理表への提出有無の記入、評点（○△×）の記帳などがある。授業はここに記述した講義一つだけではない。ほかの講義もあり、それも同じ仕方をしているのである。毎週のこの作業は骨が折れることである。このあたりのことをサポートしてくれる体制はとれないものであろうか。せめてこのようなことの支援体制を実現していかなければ充実した教育を長期にわたって実施しつづけることはきわめて困難である。研究面についてまでとは言わない。せめて教育面でのサポート体制、教育環境の改善についての配慮が望まれる。このことは望むだけでなく教員同士が知恵を出し合って実現したいものである。

註

- (1) すでに授業についてその経過を記し、反省したものに「一般教育科目の授業の反省」『岡山大学経済学会雑誌』第28巻第1号 1996年 がある。
- (2) 拙稿『『リング型工場』の成立との日本紡績業の確立』海野福寿編『技術の社会史3』1982年 有斐閣。

この授業についてのあなた自身の自己点検・評価をしてください。これは記名です。

この授業に対するあなたによる点検評価は別紙で無記名で行ないます。

あなたについての評価の参考とするとともに、この授業、そして学部授業全体の改善を目指してのことです。率直に記入してください。

I この授業について

- 1 この授業を選択した理由（複数あればそのすべて）
- 2 この授業への参加の度合（出席、配布資料記載文献）
- 3 この授業への臨み方（時間、雑談、小ペーパー代書）
- 4 授業内容の理解の程度
- 5 この授業での収穫があれば記してください

II 本日の試験について（出来具合）

III 自己評価

- 1 平常点をクリアーしていないにもかかわらず、本日受験した者は答えてください。つぎの該当する記号に○をつけなさい。（dは記述してください）
 - a 平常点をクリアーしていないので、本日は受験してはいけなかった。
 - b 平常点もクリアーしていないし、本日の答案も良くないので不合格である。
 - c 平常点はクリアーしていないが、本日は満点に近いので、なんとか合格する。
 - d その他（ ）
- 2 平常点をクリアーしている者は答えてください。
 - (1) 本日の試験について 合格点を60点とし、これをCとする。A 80以上, B 70台, D⁺ 50台, Dそれ以下として,
あなたの自己採点は A B C D⁺ D （相当するものを○でかこむ）
 - (2) 平常点にも内容多様 上記の基準で あなたの平常点は A B C
- 3 自己評点（相当するものを○でかこむ）
総合してあなたは A B C D⁺ D である。
よって単位は 取得できる 取得できない。

この授業についてのあなたの感想・意見

本紙とは別にこの授業についての学生による評価を無記名で記入して貰う。しかしあえて記名で、この授業に対する意見や感想を記すという者はここに記入しなさい。

学部	番号	氏名
学部		

1996年度前期 日本経済史 学生による授業評価

1996・9・3

この授業に対するあなたの評価をしてください。これは無記名です。

この授業についてのあなた自身についての点検評価は別紙行ないます。

この授業、そして学部・の授業全体の改善を目指してのことです。率直に記入してください。

I	この授業の選択について	大いに なった	な った	少 し な った	全 く な ら ない	無 関 係
(1)	この授業を選択した基準・理由 この授業を選択するに当たり、つぎのことの それぞれはどの程度基準となったか	大いに なった	な った	少 し な った	全 く な ら ない	無 関 係
	① 履修しないと卒業できないから	5	4	3	2	1
	② この時間帯に他の授業がないから	5	4	3	2	1
	③ 単位がとりやすいようだから	5	4	3	2	1
	④ 時間が空いていたから	5	4	3	2	1
	⑤ 先輩・友人からの情報によって	5	4	3	2	1
	⑥ シラバスの内容説明を見て	5	4	3	2	1
	⑦ その他（具体的に)	5	4	3	2	1
(2)	あなたがこの授業を選択した理由について、上の①から⑦の中で該当するものを番号であげなさい。複数の場合は重要度順にそのすべてをあげなさい。					
II	この授業について	大いに 賛成	賛 成	反 対	大いに 反対	どう でも よい
(1)	この授業におけるつぎのことについての意見	大いに 賛成	賛 成	反 対	大いに 反対	どう でも よい
	① 出席するように仕向けたことについて	a	b	c	d	e
	② 遅刻に対して厳しく対処したことについて	a	b	c	d	e
	③ 授業中の雑談を禁じたことについて	a	b	c	d	e
	④ 小ペーパー記入を毎回課したことについて	a	b	c	d	e
	⑤ 平常点合否を公表したことについて	a	b	c	d	e
(2)	この授業で次のそれぞれについての感想	よい	やや よい	普通	やや 悪い	な い
	① 授業内容の適切さ	+2	+1	0	-1	-2
	② 授業レベルの適切さ	+2	+1	0	-1	-2
	③ 授業の進め方（スピード）	+2	+1	0	-1	-2
	④ 担当者の話し方	+2	+1	0	-1	-2
	⑤ 担当者の教える熱意	+2	+1	0	-1	-2
	⑥ 担当者の教え方	+2	+1	0	-1	-2
	⑦ 配布講義資料の内容	+2	+1	0	-1	-2
	⑧ 授業内容の伝わり方	+2	+1	0	-1	-2
	⑨ この授業を履修してよかった	+2	+1	0	-1	-2
(3)	この授業の総合判定（該当するものに○をつけてください）					
	+2（よい） +1（ややよい） 0（普通） -1（やや悪い） -2（悪い）					

記入者の学部・学年・性別（該当するものを○で囲んでください）

学部 経済学部 その他の学部

学年 2年次 3年次 4年次 それ以外（4年次に留年など）

性別 男 女